

The TENDAI journal

発行所：天台宗出版室
発行人：出版室長 寺本 亮洞
〒520-0113 大津市坂本 4-6-2
天台宗務庁内 電話：077-579-0022(代)
Eメール：T-Press@tendai.or.jp

令和元(2019)年10月1日火曜日
(毎月1日発行)1部50円(消費税込・送料別)

天台ジャーナル



広報天台



カトリックの信徒団体「聖エジディオ共同体」が主催する「第33回世界宗教者平和の祈りの集い」が9月15日から3日間、スペイン・マドリードで開催された。
天台宗からは小堀光實延暦寺執行を団長に、吉澤道人宗議副議長、森定慈仁一隅を照らす運動総本部長を副団長とする10名の使節団を派遣し、諸宗教代表者らと平和への祈りを捧げた。

「国境なき平和」をテーマに宗教代表者が討議

第33回 世界宗教者平和の祈りの集い スペイン・マドリード



分科会で小堀執行が講演

ここマドリードに集い合った宗教者同士の絆をいっそう強め、相互理解と連帯こそが世界平和と繁栄をもたらすものであることを再確認し、共に行動し続けてまいりたい。

この集いは、1986年に当時のローマ教皇ヨハネ・パウロ2世聖下の呼びかけでイタリアのアッシジで始められたもので、以来、ヨーロッパ各地で年一度開かれていた。「国境なき平和」をテーマに掲げた今年の集いには、全世界から様々な宗教団体・宗派より千名を超える聖職者が参加。開会式では聖エジディオ共同体創設者のアンドレア・リッカルディ教授がこの集いの意義と歴史を振り返り、主催者を代表し歓迎した。また、中央アフリカ共和国のトゥアデラ大統領らがスピーチし、世界で起こる諸問題解決に向けた議論に期待を寄せた。

「非武装と非暴力」と題して講演した。
小堀執行は、唯一の被爆国・日本の宗教者として、広島・長崎への原子爆弾投下について触れ、核廃絶が進まない世界状況を憂いた。
そして戦争や紛争の終結だけが平和をもたらすものでなく、「貧困や飢餓、人種差別、地球環境問題が私たちの生活を脅かす存在になりつつある」と指摘。「平和とは全てが平等で何よりも地球社会に共通する正義の問題である」という見地に立って語らねばならない」と訴え、「互いの価値観の多様性を認め、共に生きることによって良き友人になることが大切だ」と、相互理解と連帯を呼びかけた。

最終日の17日は、午後6時から各宗教・宗派による平和の祈り法要が市内各所で営まれ、続く閉会式で「平和宣言文」が採択され全日程を終えた。

極微

少し前に「へえー」と思うニュースに出会った。「アメリカ・ワシントン州で人間の遺体を堆肥化し、植物などの肥料として使うことを認める法律が成立した」というもの。遺体は認可を受けた業者によって堆肥化され、遺族は植物などの肥料として使うことができるという。遺体はわらや木片など自然の材料で包み込むと微生物の活動によって数週間で土壌に変質するということ。それで「堆肥化」するわけだ。その時は「何とドライな法律だな」と感じたが、よく考えたら「土に還る」という昔からある考え方に沿うものかなとも思える。昔の土葬の時代には、時が経てば遺体は土に還り、自然の生態系の中に戻っていったのだから。ただ、危惧することもある。この法律を後ろ盾にした「商業化」である。日本で今増えている「樹木葬」のように「墓地」に埋葬するならまだ分かるが、「肥料」の材料向けのみの考えで、システム化したものとなると問題だ。「土に還る」という意味では納得できようが、しかし、「商業化」となると、どうだろう。うがち過ぎかも知れないが、どうもスッキリしない。亡くなった人への尊厳性が感じられない気が一方ではするのだ。▼ともあれ、人間もこの地球上の「生命の循環サイクル」に組み込まれた生き物であるとの認識を再確認させてもらったニュースであった。